

## 人類最初の世界観—神話にみる先人たちの考え方

2011. 5. 19

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

≪前回の第1講義のふりかえり≫

- ①哲学は「知を愛する（フィロ・ソフィ）」こと。
- ②知って、「へえ〜」だけで終わらせない。考える。問題意識や「問い」をもつ。
- ③およそ2400年前、ソクラテスは、「人はどう生きるか」という「問い」を立てた。
- ④哲学は基礎学問なので、応用力が高い。仕事や活動に生きてくる。
- ⑤ぶつかって、対話して、自分の成長にワクワクしよう。

### 一。原始的共同体の世界観—その一般的特徴

#### 1. 自然環境との一体感、恐れ、畏敬

◇人間の生産力、技術、知識のきわめて乏しかった時代

「外的なものとして人間に対立する不可解な外部の自然によって、人間がほとんど完全に支配されている状態」

(エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』)

\*「地球にやさしい」という意識（これはこれで議論のある言葉だけど）は、不可能だった。

- \*なぜ土から植物が育つのか？
- \*なぜ雨が降るのか？
- \*雷とはなにか？ 地震とは何か？
- \*死んだ人がなぜ夢に出てくるのか？

- ・・・わからなかった。
- ・・・でも、せいっぱい考えた。

「そのころ人びとは、まだ自分自身の身体の構造についてまったく無知であり、そして夢のなかにあらわれるものごとから刺激されて、彼らの思考や感覚を彼らの身体の働きではなくて、この身体に住んでいてその死にさいして身体をみすて去っていく、特別な霊魂というものの働きであると考えようになった」

(エンゲルス『フォイエルバッハ論』)

それは、

「宗教的慰めをもとめたからではなくて、身体の死後に、ひとたびみとめられた霊魂なるものをどう扱ってよいかを、同じくどこにもみられる無知のためにわからず当惑したからである。これとまったく似た道筋で、自然の諸力を擬人化して、そこから最初の神々ができた」

(同前)



◇アニミズム（精霊）的世界観

- \* 森には森の神、山には山の神…
- \* 風にも、火にも、木にも、草にも、  
精霊（神）がひそんでいると考えた。

手塚治虫『火の鳥 黎明編』より



私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかいません  
千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ 冬はダイヤのように きらめく雪になる  
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる 夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 死んでなんかいません  
千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています

2. 思考活動の「抽象化」が可能になったからこそ

◇言葉の獲得と発達

- \* 抽象化の能力。普遍的なものを取りだす（一般化）。

◇彼らなりに現象の奥にある本質をとらえようとした努力の表現

◇しかし、普遍化、抽象化をすることは、具体的な現実からはなれることを意味する

◇いったん生み出された“観念”は「ひとりあゆみ」を始める

- \* 司祭者、呪術者の出現—特別な地位をもつ
- \* ただしこれも、未熟ではあったが、自然環境に働きかけようとする人間の努力の  
表現でもあった。生贄（いけにえ）を捧げる行為もそのひとつ。
- \* 宗教へとすすむ過程として

## 二。神話にみる先人たちの考え方

### 1. 神話とは？

「神々や英雄たちの事跡をつたえる神聖な物語の形で、自然・社会・人間・その生活についての見方や態度、つまり世界観、歴史観を表現したもの。原始社会のなかから生まれて、口誦\*をはじめ、歌舞・儀式行事・造形物によって伝達されてきたその一部は、古代・中世の先進国人の手で収録され、とくに近代以後には…  
(略) 人類学者、民族学者、宣教師などが、世界各地の多量の原始的な神話を採集した」  
(森宏一編『新版 哲学辞典』青木書店)

\*【こうしょう一声をあげてよむこと】

「神話とは、原古つまり世界のはじめの時代における一回的な出来事を語った物語で、その内容を伝承者は真実であると信じている。したがって神話は聖なる物語である。神話は存在するものを単に説明するばかりでなく、その存在理由を基礎づけるものであり、原古における神話的な出来事は、のちの人間が従い守るべき範型を提出している。また神話には人類の思考の無意識の構造が基礎にある。神話は神話的な出来事の反復としての儀礼とともに、それを伝承する民族の世界像の表現である。

(略) 神話には、世界・人類・文化などの起源を語る創世神話と、神々と英雄の波瀾に富む生涯を語る神々の神話ないし英雄神話に分けられる。神話は伝説や昔話とは別のジャンルであるが、モチーフや話型においては共通していることも少なくない」  
(『世界神話辞典』角川選書)

### 2. テーマ別神話のあれこれー「問い」をたて、答えを考え出した

#### ◇世界の起源

\*いくつかのタイプに分類できる(『世界神話辞典』より)。複合タイプも。

#### ①創造神による創造(あるいは無からの創造)

→意志の力によって何かを生じさせることができるという考え方に立つ。

#### ②原人(世界巨人)の死体からの創造(死体化生)

→新しいものは古いものの死によって生み出されるという世界観を反映。

#### ③宇宙卵からの創造

→卵から生命が生まれることからの類推。

#### ④世界両親による創造

→両親から子供が生まれることからの類推

→日本の神話はこの典型(イザナギとイザナミの国生み)

#### ⑤進化型

→洪水の水が引いた後から草木や生物が自然に出現するかのように見えることからの類推か。

#### ⑥海の底から持ち帰った泥による

→水の底には土があるという知識と、子供のことに水たまりの土からさまざまなものを作り出して遊んだ記憶の両者から編み出された考え方か。

\*たとえば、東南アジア、スマトラ南部・レジャング族の「世界の起源」

「原初には虚無があった。そこから水が流れ出し、つづいて匂いが現れた。大地が現れたが、足跡のように小さかった。それから木の葉ほどの大きさの天が出現した。やがて大地は大皿の大きさに、天は傘の大きさに拡大し、神々も出現した。それから9羽の鳥が来た。鳥たちは卵を産んだ。それぞれの卵は9つの部分からなっており、卵が割れると、はじめの部分からはすべての諸民族を伴って大地が現れた。第2の部分は天になった。第3の部分からは太陽・月・星が発生し、第4の部分からは空気が、第5の部分からは海と河川が、第6と第7の部分からは祖先たちが、第8の部分からは砂と石が、第9の部分からは魚の祖先が発生した」(『世界神話辞典』より)

\*コロンビアのチブチャ族

「コロンビアのチブチャ族によれば、この世界がまだ存在せず、夜だったころ、光は神という意味のチミナグワと呼ばれる大きなもののなかに閉じ込められていた。チミナグワは起き上がって耀きだし、体内に納めていた光を解き放った。光の出現とともに、万物が創造され始めた。最初には神は黒い大きな鳥たちを出現させ、世界を飛び回って、純粹で輝かしい光の蒸気をくちばしで撒き散らすように命じた。鳥たちがそうすると、全世界が今日のように明るい光で満ちあふれた」(『世界神話辞典』より)

#### ◇人類の起源

\*人類の起源は、しばしば世界起源神話の一部をなしている。またそうでない場合も、類似した構造やモチーフをもっていることが多い。

\*創造型

→創造神がなんらかの方法で人間を創造したという形式であり、次の2つに分けられる。①創造神が単独で人間を創造した形式、②創造神が協力者と一緒に、あるいは反対者と争いながら創造する形式。

\*進化型

→創造神の介入なしに、ある種の原初の物質や胚素から人間が自発的に発達あるいは進化したという形式。

\*出現型

→多いのは「地中から」タイプ。天からの降下、植物(木)からの出現タイプも。

\*多い「土からの創造」タイプ

→土をこねて人間を創造するモチーフが、世界的に広く分布している。おそらくは土器作りが基礎にあるものと考えられる。

→いまから5千年前に、チグリス、ユーフラテス河畔に栄えた人類最古の都市文明であるシュメルの神話では、神々が、つらい農作業をさせる身代わりとして、粘土から人間をつくったとされている。自然環境が背景に。

#### ◇死の起源

\*なぜ不死を得られないのかー人間の太古からの「問い」だった。今日でもなかなか深い哲学的・生物学的テーマでもある。

\*脱皮型タイプ、人間の行いによって「死」が運命づけられたタイプなど。

\*日本の神話では、大きな影響力をもった『旧約聖書』では。

#### ◇火の起源

- \*もっとも有名なのが、ギリシャ神話の「プロメテウスの火盗み」
- \*文化、死、性との関連づけも

「火を持つことで人間は文化をもち、他の生物と区別されたわけだが、その人間をまさに人間たらしめている文化の営為が、火の獲得というそもそもの出発点からして、すでに神と自然に対する反逆であり侵害であったことを、人間は常に意識し、火の起源神話でそのことを語り続けてきたのだ」(『世界神話辞典』)

#### 【補論—原発「安全神話」にたいするすイチ考察】

- \*人類は、100万年以上前から、火を自分でつくって使いこなし、生活を豊かにする道具に変えた。その進歩は巨大。しかし、この火でさえ、いまだに私たちにとって、ときに危険で命を奪うものとなることは、自明のこと。
- \*人類が原子力(核)エネルギーを発見したのが1930年代。これは、“第2の火の発見”と呼ばれるほどの大事件といえるものだった。
- \*この核エネルギーは、最初の実用化が「核兵器」だったこと、その後も米軍の「潜水艦」の動力源としての開発、という不幸な歴史をもった。
- \*巨大なエネルギーとともに、たいへんな放射能をもつ。これを、人間は完璧に制御できる技術をまだ獲得していない。
- \*この不完全な技術を、「絶対安全」という「神話」にまつりあげてしまったのは、哲学的側面から考察すれば、自然への畏敬の欠如、人間のカへのおごり、と言えないか。経済学的な考察でいえば、利潤最優先の問題につきあたる。
  
- \*太陽、大地、水、雨など、自然への畏敬。他の生命への畏敬の感情。

#### ◇他にも…洪水、作物、女性、天体 etc

- ★こうしたさまざまな「問い」への答えのなかに、先人たちの世界観のめばえとその創造力をみることができるし、その地域や社会の自然・文化的側面を類推することもできる。地域の風景を神聖化することも一つの機能。

「神話とは何でしょうか、それは世界の成り立ち、人類の誕生などを人間がまだ存在しない古い時代の神々の活躍をつうじて明らかにしようとするお話です。太古の人々も今の人々と同じように多くの疑問をもっていました。自分たちの住む世界や人間そのものがどのようにしてできてきたのか、彼らも考えたのにちがひありません。想像力を働かせ、頭をしぼったあげくに生み出された、いわば彼らの想像力から生み出されたものが神話だといっていいでしょう。想像力から生み出されたといっても、それは勝手きまま、いかげんに生み出されたという意味ではありません。太古の人でも、つじつまのあわないことを考えだすわけではないでしょう。むかしの人だって自分をとりまく自然環境や家族や社会といったものはあったのですから、それがそのままとはいえないまでも神話に反映されてくるはずで。そういうふうに、わたしたちが太古の人々の作った神話をとおして、古い時代の世界や人間のありようをいろいろ想像してみるのはとても楽しくて、意味のあることです。さらに、国々による神話のちが

い、たとえばギリシャ神話と北欧神話を比較してみると、民族による神話のちがい、神々のちがいがよくわかって、興味はあっという間に深まることでしょう」  
(P・コラム、尾崎義訳『北欧神話』「あとがき」より、岩波少年文庫)

★「そもそも何か？」の問いは、私たちにとっても、大切に、欠かせないこと。  
本質をつかむ努力。



### 3. 地域別神話のいくつか

◇ギリシャ神話

◇北欧（ゲルマン）神話

◇日本の神話

### 4. 神話の説明では満足できなくなった—ギリシャの哲学者たち

◇紀元前700年頃

\*ホメロスとヘシオドスがそれぞれギリシャ神話を書物としてまとめた  
「イリアス」「オデッセリア」「神統記」

\*これは、まったく新しい状況を招いた。ひとたび神話が文字に書かれると、神話についての議論ができるようになった。

◇神話に批判の目を向けたのが、ギリシャの最初の哲学者たちだった

\*それは、あまりに人間のありようと似ていた…

\*「これは人間の空想の産物ではないのか？」という問題意識が生まれてきた

\*自然を、自然の姿そのまま理解しようとする試みが開始された

→次週の学び！

## 【補章】人はなぜ物語をつくるのか

1. 1人ひとりの人生そのものが、たった1つの「個別性」をもつ

◇人間は、それぞれ自分の物語を生きている

\*個別性、というところに、物語の本質のひとつがある

◇自らの経験をストーリーとして語る・・・物語る

\*たった1つの物語だからこそ、人はその物語に惹かれ、興味をもち、喜怒哀楽の共感をもつ。人生のストーリーを聞くことは、とてもおもしろい。

◇やがて、「現実から離れた物語」（フィクション）を創造する力が。

2. 「つくられた物語」も、人を励まし、道徳を守らせ、希望を持たせる役割をもてる

◇ギリシャ神話・・・英雄ヘラクレスの試練

「苦しまなくても生きていける、と言っている神話には、一度も出会ったことがありません。神話は私たちに、苦しみにどう立ち向かい、どう耐えるか、また苦しみをどのように考えるのかを語ります」

（ショーゼフ・キャンベル+ビル・モイヤーズ、『神話の力』早川書房）

\*ただそこには、自己責任論、運命論、精神絶対論が入り込む余地がある

◇長久も、小説や映画から学んだことは数知れない

◇物語をつくる専門家も登場してくる…作家など

\*小説、お芝居、映画・・・

◇人生は1回限り…だからそれ以外の人生を夢見るのかも

「人が、小説や演劇、映画などを好むのは、きびしく限定された自分ひとりの人生以外の『人生』を夢見ることができるからかもしれない」

（池波正太郎『私の仕事』朝日文芸文庫、1996年）

【おまけーサンタクロースって、いるの？】

◇これは神話ではなく伝説。4世紀頃の東ローマ帝国小アジアの司教（主教）、教父聖ニコラオス（ニコラウス）の伝説が起源と言われている。貧しい家の煙突から金貨を投げ入れた。暖炉には靴下があり、靴下のなかに金貨が入った。

◇いったん「伝説」（物語でも同じ）がつくられると、それがひとり歩きし、ときには社会的・文化的な意味や役割をもち、定着することがある。

◇人間の創造力の豊かさ。

◇子どもたちへのプレゼント。社会的な意味。ただ日本では行き過ぎ感も…。

◇ドラえもんも、いる。



次回（26日）は、「哲学のふるさとーギリシャの哲学者たち」です。